

## 論文の要旨

学籍番号 62120006

氏 名 森本 淳子

題 目	地域におけるグループを活用した支援方法と当事者との共同創造 ーメンタルヘルス不調を抱える母親を対象とした「ひろば」のエスノグラフィーー
<p>【研究の背景】日本において、メンタルヘルス不調を抱える母親の妊娠・出産・子育ての機会が増加しており、妊産婦の自殺や乳幼児への虐待が懸念され、メンタルヘルス不調を抱える母親の支援が喫緊の課題となっている。そのために地域においてメンタルヘルス不調を抱える母親のためのグループという方法が様々なかたちで実践されている。しかし、母親の体験とそれを支える支援者による関わりのプロセスについて詳細に明らかになっていない。</p> <p>【研究目的】地域において、メンタルヘルス不調を抱える母親のためのグループ実践を通して、メンタルヘルス不調を抱える母親が子育てをすることはどのようなことか、その母親の語りの特徴とグループとの関係はどのようなことか、地域で実践されるグループの母親と支援者の相互交流と共同創造はどのようにあるかについて、明らかにする。さらに、今後のメンタルヘルス不調を抱える母親へのグループを活用した細やかな支援方法と当事者と支援者の共同創造の方向性を明らかにする。</p> <p>【研究方法】本研究は、文献研究を行いその結果をふまえ、エスノグラフィーの手法を用いて行う質的記述的研究である。メンタルヘルス不調を抱える母親が地域で自主的に参加するグループ「ひろば」を、月 2 回約 1 年に渡って開催した。データ収集は、グループの参加観察、インタビュー調査、関連書類入手の 3 種類以上のデータ収集方法を組み合わせるトライアンギュレーションを行った。参加観察については、研究者がファシリテーターとして身を置き、調査者役割の分類（佐藤, 2002）から「参加者としての観察者」と「観察者としての参加者」の間を行き来する立場で行った。研究者は、グループのやり取りとインタビューの録音データ、フィールドノートによる逐語録を作成し、指導教員のスーパーヴァイズを受け、その内容も反映させながらグループ実践を行い「ひろば」の動きを再構成したものを作成し分析した。</p> <p>【倫理的配慮】本研究は、神奈川県立保健福祉大学研究倫理審査委員会において承認を得た（保大第 5-22-10）上で実施した。</p> <p>【研究結果】「ひろば」は、計 23 回開催された。研究者を除く研究参加者は 12 名（メンタルヘルス不調を抱えた母親 8 名と支援者 4 名）であり、各回の参加者は 2～6 名、研究者を除いた延べ参加者数は 94 名であった。地域の中で母親が語る場となるグルー</p>	

プは、①「ありふれた日常の話題でつながり、自分の抱える不安を語る」、②「誰かに語る目的と語る他者から何かを得る目的で集う」、③「定着した参加者がグループに安心感を得て語る」の3つのプロセスに分けられ、回を重ねるうちにグループの相互交流が深まり、メンタルヘルス不調を抱える母親の子育てについて、【子育てで自らの過去が映し出され目の前の子どもの姿に不安を抱く】、【異常と正常の間で自分に不安と恐怖を抱き疑心暗鬼になる】、【家族の問題に追われるうちに逃げ場と自分らしさを失う】、【自らのライフイベントや社会の変化によって慢性的な疎外感と寂寥感を抱く】、【母親らしさと自分らしさの間で葛藤する日常から飛び出そうと挑戦する】の葛藤と苦悩と傷つきのテーマが語られた。メンタルヘルス不調を抱えた母親同士の相互交流では、参加者が共感し労い合うだけでなく、グループの受けとめる力に触発され自分のことを語れるようになっていった。そして当事者と支援者の相互交流では、支援者が専門職を離れて一人の母親として自己を語ることで当事者の語りと交錯し絡み合い、当事者が自分らしい母親らしさの再構築へ進む相互交流の特徴が明らかになった。

【考察】地域においてメンタルヘルス不調を抱える母親が子育てをするということについて、特に精神疾患を抱える母親は自分への恐怖と不安を抱えながら子育てを行っていたことが明らかになった。そして、多くの参加者は、家族のことを考えて子育てに取り組む結果、自分の時間や居場所を失い、自己が拡散し自分らしさを失っていることが明らかになった。さらに、メンタルヘルス不調を抱える母親の葛藤と苦悩と傷つきの語りは、全ての母親に起こりうる地続きのものであると考えられた。

メンタルヘルス不調を抱える母親のグループでの相互交流は、「ピアカウンセリングの場となるグループ」、「ケアする者とケアされる者が自らの体験を通して繋がるグループ」、「メンタルヘルス不調を抱える母親が自分らしさと繋がるグループ」の視点が浮かび上がった。また、支援者が「一人の母親」と支援者という役割を行き来しながら自然に当事者をサポートしていた。そして、グループの中でメンタルヘルス不調を抱える母親が、家庭や子育てから離れて自分のための時間をとること、自分を主語にした話を語るための場所と時間を持つこと、自分の経験や趣味を活かし自分らしい方法で社会参加していくことを各々が語り始め、自分らしい母親らしさを再構築していた。グループ「ひろば」の相互交流によって、メンタルヘルス不調を抱える母親が、自分らしさと母親らしさを統合し自己を再構築することが共同創造されていた。地域における母親の自分らしさを支えるグループの実践では、ケアする者とケアされる者や専門職や機関が垣根を越えて共同創造する物語り（ナラティブ）によるケアについて今後の方向性が明らかになった。